

第10分科会

「認知発達に基づく支援の在り方」 ～成功体験を通して学ぶ子ども～

助言者	瀬戸口 裕二 (元南九州大学人間発達学部教授)
司会者	鶴野恵理香 (信愛こどもの園)
問題提起者	松浦 茜音 (鹿屋幼稚園)
記録者	山下 梨奈 (しぶし幼稚園)
記録者	若松 生実 (しぶし幼稚園)
運営委員	三浦 昌平 (大崎幼稚園)

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

保育は、子ども理解が始まると言っても過言ではない。子どもをしっかり捉え、正しく理解することは、私たち保育者に求められる資質・能力の基礎となるとも重要な分野である。そのためには、発達の道筋を学び直し、発達の全体像を俯瞰した上での保育実践であることが重要である。私たち保育者には、子ども理解につながる様々な記録やその他の情報を通して子どもの成長・発達を可視化し、それをもとに保育者同士で語り合い、多様な考え方を大切にしながら多面的に子どもの姿を捉えていく姿勢が重要である。また、そのことを保護者と共有し子どもの成長をともに喜び、考え合えるような機会を持つことも大切だと考える。多様性の尊重やインクルーシブ社会の実現が求められる現代においては、特別な支援を要する子どもだけでなく、「すべての子どもに対して一人ひとりに応じた援助を行っていくこと」が大切である。

このことは、幼児教育の本質であり大切にしていけるべき教育の在り方だと考える。子ども理解を深めることによって、一人ひとりの違いが受け止められ等しく尊重され保育の公平性を保証していくことがますます重要になってきている。以上のことを視点とし、本園の現状である支援を要する子どもの増加に伴い、改めて「一人ひとりに合った支援の在り方」を見直すために、園内研修で認知発達理論について学びを深め、これまでの実践を振り返り見直していくことにした。

【研究・研修の手がかり】

- ①一人ひとりの発達の状況に応じた支援（個別の指導計画）
 - 個別の指導計画で見通した支援の実践（その一つとして「にこにこタイム」）
 - 分かりやすい環境整備（支援ツール）
- ②園全体で取り組むために
 - 支援方法を導く話し合い（ケーススタディ・工夫の共有・職員間の合意形成）
 - 保護者との共通理解と協働した取り組み
 - 学級経営と個別の支援の調整
(特性に応じた集団支援の場の設定・個別の発達課題に応じた支援の場の工夫)
 - 研修会や学習会（認知発達に関する講演会、ケースカンファレンスや園内の助言）

【研究計画】

(令和6年度)

- ・適切な支援をしていくために個別の指導計画の見直し充実を図る。(行動観察をし、認知の偏りを探る・感覚運動アプローチに基づいたアセスメント・個人面談、連絡ノートの活用)
- ・個に応じた支援の場「にこにこタイム」の設定、継続を図る。

(令和7年度)

- ・「自ら取り組める子」になるために、集団活動の場を日課に組み入れ、実践を続けながら検証していく。
- ・個別の発達に応じた支援の在り方や問題行動のある子どもへの支援について学びを深め、個別支援の場を設定し、実践し検証していく。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマの捉え方

子ども達に成功体験を積み重ねていくためには、「一人ひとりの発達に応じた適切な支援方法」を見出していくことが必須であると捉えている。そのためには、まず「その子を知る」ことが大切だと考える。子ども達は、どの子も「分かるようになりたい」「できるようになりたい」という気持ちを持っている。認知発達理論からいくと、その子ども達の「できた」を増やす為には、まずは「やろうと思った」情動を褒め、「成功する為の援助」をし、出来たら「なぜ成功したのか」を一緒に振り返り、次は「自分でやってみる」という、このプロセスが大切であると記してある。このことを基に、行動観察から認知の偏りをアセスメントし、「一人ひとりの発達に応じた適切な支援方法」を見出し個別指導計画に位置づけ、実践し研究を深めていくことにした。

(2) 研究の内容

- ・これまでの実践を基に振り返り分析する。
- ・「一人ひとりの発達に応じた適切な支援方法」を見出し、個別の指導計画に位置づける。
- ・園内研修を実施し、職員間の共通理解や合意形成を図る。

(3) 研究の方法

- ・行動観察をしアセスメント表にまとめ、個別指導計画に活かす。
- ・園内研修（ケーススタディ）で、支援方法を探る。
- ・日課の見直しをし新たな取り組みを位置づけ実践し、子ども達の変化を探る。

(4) 実践例

- ・Mちゃんの行動観察をしアセスメント表にまとめ、認知発達の偏りを探り支援方法を見出し実践したことをまとめた。
- ・個別の支指導計画の見直しをした。
- ・これまで取り組んできた環境整備を構造化という視点からまとめた。
- ・保護者や関係機関との連携について振り返り、まとめてみた。
- ・園内研修で「ケーススタディ」を取り入れ支援方法を探った。
- ・日課の見直しをし、小集団の「にこにこタイム」と個別の支援の場を位置づけ、取り組み始めた。

(5) まとめ

子ども達に成功体験を積み重ねていくためには、一人ひとりの発達に応じた適切な支援方法を見出し、個別の指導計画で見直し、実践しながら見直していくことが大切であると捉え、まずは、その子の行動観察から認知の偏りをアセスメントし、それに対してアプローチ出来ることを見出し実践していくことに取り組んできた。少しずつではあるが、出来るようになったことの喜びを保護者と一緒に共有している。「自ら取り組み、成功体験を通し、振り返りができる子」になることが、「自分で自分のことが出来るようになっていくことに繋がる」とする認知発達理論を基盤に据え「取り組みの援助」「成功するための援助」「振り返りの援助」となる適切な支援方法を見出し工夫しながら、日々、子ども達に成功体験を積み重ねていきたいと考える。

また、このことを、職員間、保護者間、専門機関と連携を図り、共通認識のもと取り組んでいくことを大切にしたいと考えている。そのために、定期的に外部講師を招いての園内研修やケースカンファレンスを行い助言して頂きながら研究を深めていきたいと考えている。

(6) 今後の課題

日課の中に、小集団グループでの活動時間や個別の活動時間を位置づけ取り組んでいきたいと考えているが、グループ分けや内容について検討を要する。また、このことについて、職員間での共通理解を図り、協力体制の構築や合意形成を図っていく必要がある。

【討議の柱】

- ・子ども達に成功体験を積み重ねるための工夫について
- ・子ども理解を深める上で、必要とされる職員間の共通理解を図る取り組みや専門性を高めるための工夫について

【討議内容】

- 1 子ども達に成功体験を積み重ねるための工夫について
 - 自由保育の中でサークルタイム等を行い、子ども達が自分で考え、話し合いその発言を汲み取り、保育に活かしていく。出来たことを褒めていき、成功体験に繋げていく。
 - 保護者と連携を取りながら出来た事等を、保護者も保育者も子どもの事を褒める事で、成功できた事が強みになる。又、次の活動も意欲的になる。
 - 一人ひとりに寄り添い、友だちからの刺激をもらえるような環境設定を行っている。
 - ふわふわの木を導入し、友だちの出来た事、思いやりの気持ちを感じた時に書く。
 - 成功体験を一緒に共有する。
- 2 子ども理解を深める上で、必要とされる職員間の共通理解を図る取り組みや専門性を高めるための工夫について
 - 支援の取り組みを園全体で行っている。職員会議を行い、共通理解を図る。話し合いの時間を設ける事が難しいのでノートを作り、情報共有している。
 - カリキュラムを全員で共有し、個別にも作成し、勉強し、研修会での話も共有している。
 - 子どもの好きな事や興味を活かした支援ツールを作成する。
 - 専門機関と連携し、年に数回関係機関会議を行う。子ども達が過ごしやすいように話し合う。
 - 些細な出来事でも共有し相談する事で様々なアイデアが生まれる。

【質疑応答】 A 瀬戸口裕二先生

Q 講話の中で前提条件（子どもの注意の状況）によって見え方が違うとおっしゃっていたが、園などで元気な男の子を見た。前提条件として多動の子ですよって言った時に保育者はどういう風に解釈するのか。

A 大切なのはどのように多動であるのかを極めること。一般的に見てある程度の年齢の子どもだと多動は当たり前という見方もある。同じ年齢の子どもと比べて多動という比較の仕方もある。私たちは、この周囲との比較ではなく、その子どもの中はどうかかなという事を考えている。これを個人内差（個人の中にある差）と言う。一般的に言う個人差は、個人間差と言って、個人と個人の間にあるもしくは集団と個人の間にある差を個人差と呼ぶ。私たちは、子どもの凸凹を考えていく立場なので個人内差を見ようとする。例えば、ある子どもが多動になる前に机を叩いて刺激を与え、この子どもが刺激に対して他の場所で何かをやっていたにも関わらず100%の注意で机の音に反応したとなると、この子どもは注意のコントロールが上手く一定なのかもしれない。これはこの子どもの中の被転導性と言う。このように個人内でコントロール困難な要因による多動性であれば、ケアが必要になる。一般的な子どもが、落ち着かない程度で内的な注意のアンバランスがないのであればもう少し様子を見る。ただし重要なキーワードとして、“もう少し様子見る”は何もしないで放置するではなくその子どもは多動なのかもしれないと思って支援を始めてみる事が、様子を見るという言葉として正しい。なぜならばその支援が有効であれば時間を無駄にしないで済む。個人の中で認知的な特性や偏りが上記に基づいて起こっているのかというのが見られると確実な支援に繋げていける。

Q 小学校でのマンツーマンは手厚い支援なのか。

A 例えば、多動で教室からすぐ飛び出す子ども→居場所が無く、活動に参加できず、イライラして立ち上がってしまう。飛び出すと大人が反応してくれる。飛び出しが本人にとって有効な手立てになる。小学校などに巡回等で訪問すると、支援員の先生は支援を必要とする子どもの側にずっと付いている。そのことが飛び出しを助長している場合も多い。近い距離間で付いているのではなく、まずは距離を離してみる。授業前に支援員の先生は事前に子どもと打ち合わせをし、活動からタイムアウトできるルールを共有して出入口に座って待っておく。ルールに基づいた調整を何らかのツールで共有する。そうする事で座れるようになる事が多い。座らせる支援をするより、その子どもが主体的にそこにいる支援を行う。先生は自分ひとりで抱え込むのではなく方法を探してみる。チームで方法を探したり、方法に適応して出来るようになると上手くいくようになる。

【助言者のまとめ】

助言者：瀬戸口裕二先生（元南九州大学人間発達学部教授）

① 認知の発達について

物事に反応したり、話したりする等全ての事が脳で処理されているプロセスを認知処理という。子どもは産まれてからある程度育ってきて発達過程をたどり、一定の発達過程を経た子どもがある活動の準備が出来ている前提で例えばハサミを使う活動がカリキュラムに出てくる。何らかの困難によりこの準備が十分ではない子どもがいた時になぜ上手くいかないのか考えていく事が大切である。

例えば、健常な子どもは意図的に行わなくても一定の年齢になれば言葉を獲得する。しかし、障害のある子どもはその通りに行くのが難しい。私たち健常である人々は意識せずに獲得できているので、このつまづきを正確に理解する事が難しい。このいつの間にか獲得できたことを客観的に正しく理解していかないと、発達支援にはなかなか繋がらないのである。このような支援は療育に仕事という言葉聞くことがある。療育児であっても健常児であっても子ども達は生活をしている。その場でどの様に子どもが自己実現していつているのかを支えるのが、生活の場を担っている大人たちの責任である。生活の場が幼稚園で療育の対象ならば療育のやり方を同じようにしないといけないのではなく、その子どもの生活の場として自己実現していく事に必要な事だったら徹底して取り組む責任がある。これは在籍園の責任だと言える。

② 認知処理について

私たちが捉えられている世界、私たちの処理過程が本当に正しいのかそれぞれみんな違うのではないかと思ったときに、私たちは自分の認知に目を向けることができる。発達障害の子どもたちの認知特性をもう少し考えてみようと思えるかもしれない。これが認知処理の世界である。認知処理は一般的に見たり覚えたりするのは得意だが書くのは苦手というように、得意・不得意というでっぱりへこみの中で認知処理というものを行っている。子どものでっぱりへこみや苦手な事を考えながら、苦手な事に直面させて沢山失敗をして、次に取り組む事自体をやめてしまうような子どもがこれから出てこないようにするためには、成功体験を通していく事は必要である。でっぱりへこみを把握していくためには、認知バランスを把握していく事が大切になってくる。方法としてはWISC（ウィスク）などの検査がある。検査結果のレポートを共有したり、保育所等訪問支援の方々が保護者と園の間に立ちアドバイスももらったりして、検査結果から子どものプロフィールをしっかりと把握することが重要である。担任一人で抱えるのではなく、他の人の力も借りながらその子どもに対して地域全体の資源や専門家の連携で支援していけるようにする。正しい認知の発達の状態、バランスを全員で把握し共有していく事が大切である。共有の中でも職員内で子どもの現状等について語り合う等の仲間関係を作っていく事が大切になってくる。また、知的障害と発達障害は支援の仕方が違っていて、知的障害は繰り返しかつ生活に根差した具体的な体験を通して学ばせるのが支援のやり方の一つである。ここでも認知のバランスをしっかりと把握する事が大切である。特性に応じた支援が求められる根拠がこの認知処理過程の把握にあると言える。

③ 平等均一について

提供する支援に着目して支援を均一にしてしまうと参加が不平等になる。平等とは支援の質や量はそれぞれ異なるが参加状況（出来ること）が平等であることを指す。活動への参加のためには、どの子ども違った特別な支援を必要としている。

④ まとめ

子どもは、意欲に支えられて活動にチャレンジし、上手くいった経験をもとに学びを突き動かしていく存在である。子どもが成功をしたときにどのようにして成功したのか保育者だけ知っているのではなく、子ども自身が成功する手立てを知らなければならない。そこで、まずは「取り組ませる」「成功するように助ける」「どのように成功したのか振り返らせる」という支援プロセスが見えてくる。

